

韻律から見た『楞伽經』の成立史問題について

—— śloka の vipulā パターンに注目して ——

石橋 丈史

1. はじめに

『楞伽經』(LAS)の成立史について、以前、思想内容という点から見た場合に、「偈頌品」(SAG)の經典本体に対する先行性を指摘した¹⁾。今回は、韻律(ślokaのvipulāパターン²⁾)という点から見た場合に、「偈頌品」中の偈と本文中にある偈との間にどのような相違があるかを明らかにし、それぞれの特徴を他文献とも比較することで、同經の成立史問題について考察したい。

2. LASのvip.パターン

SAGには884偈が含まれているが、そのほとんど(880偈)がślokaである。その第2肢の正規形(pathyā)と非正規形(vipulā)の数を調べた結果、そのvip.パターンは次のような数値となった。vip. 1: 52, vip. 2: 59, vip. 3: 87, vip. 4: 30, vip. 5: 8, T: 2, B: 7。特徴としては、vip. 3が最も多く、次いでvip. 2, vip. 1の順になっているが、この特徴はSmith [1961]によれば、より原初的な形態を持つパーリ語のvip.パターンと同じである。グプタ期以前のシュローカ文学においては、vip. 1, 2, 3が主要な部分を占め、vip. 1が最多となる傾向にある³⁾。しかし、より古いパターンでは、vip. 3が最多になり、vip. 2がvip. 1よりも多いか、同程度になると指摘されている⁴⁾。したがって、SAGのvip.パターンは、パーリ語のそれと同じであることが分かる。

反対に、本文中にのみ見られる偈は、SAGとは異なるパターンを示している。第一章、第二章「百八句問答」には合わせて130余のSAGにはない偈があるが、次のようなvip.パターンを示している。第一章 vip. 1: 7, vip. 2: 3, vip. 3: 6, vip. 4: 2, vip. 5: 0, T: 0, B: 1., 「百八句問答」 vip. 1: 10, vip. 2: 5, vip. 3: 4, vip. 4: 0, vip. 5: 3, T: 0, B: 1であるが、ともに、vip. 1が最多となるサンスクリット古典と同様なパターンとなっている。

(150) 韻律から見た『楞伽經』の成立史問題について (石橋)

その一方、第三章「無常品」では殆どが重複偈で占められているが、第三章のみにある偈が27偈あり、その vip. パターンは小数ながらも、SAGのパターンと類似している。すなわち、vip. 1: 0, vip. 2: 1, vip. 3: 3, vip. 4: 2, vip. 5: 0, T: 0, B: 0である。この27偈は、いずれも内容的にその直前の散文部分の要約、あるいはその内容をさらに発展させているように読み取れる。そうであるならば、これらの偈は散文作者によって作られたと考えるのが自然である。それがSAGと同様な vip. パターンを示しているということは、散文作者もSAG作者と同じか、同じ属性の人物であることが推察される。Takasaki [1980] (高崎 [2010]) によれば、SAGはLASの「素材集」であり、その中から主題に合わせて偈を取り出し、散文釈を付すとともに新たな偈も付加することで、現存の形になったものとされる。上述の vip. パターンの類似はその説を支持しているように考えられる。SAGとの多くの重複偈を持つ他の部分も同様に考えられるのではないだろうか。

以上をまとめると、次のようになる。①SAGの作者はパーリ語に習熟した人物(つまり上座部教団の僧侶)であった可能性が高いのではないか。②第一章、第二章「百八句問答」は、SAG作者とは別人物によって作られ、後に編入されたと思われる。③第三章のみに存在する偈の vip. パターンから、SAGとの多くの重複偈を持つ第二～第四章、第六章はSAG作者と同一人物か同じ属性の人物によって作成された可能性が高いのではないか。

3. 他文献との比較

今回、LASとも時代的にも近いパーリ語文献として *Dīpavaṃsa* (DV), *Mahāvāṃsa* (MV) の vip. パターンを調べ、比較検討したい。DVの vip. パターンは次の通りである。vip. 1: 71, vip. 2: 79, vip. 3: 232, vip. 4: 134, vip. 5: 128, T: 22, B: 70. 特徴としては、vip. 3が最も多く、vip. 1とvip. 2とが同程度で、vip. 2が少し多いという点では、SAGと同様な傾向を示している。ただ、vip. 4, vip. 5, Bがかなりの割合で見られる。これは、パーリ語が元来話し言葉であるため、崩れた形ともいえる vip. 5, Bが多く残っていると見るべきなのだろう。また、*hypermeter* が頻繁に見られ、*pathyā*, *vipulā* 形の判断が分かれる偈も多く見られた⁵⁾。SAGでも *hypermeter* は見られ、DVと同様に、解釈が困難なものが見られた。

これに対し、MVの vip. パターンは次の通りである。vip. 1: 281, vip. 2: 173, vip. 3: 488, vip. 4: 319, vip. 5: 64, T: 6, B: 11. こちらは、vip. 3が最も多いが、vip. 1がvip. 2よりも多くなっている。この特徴は、『俱舍論』等他の仏教梵語文

献と同じ傾向を示している⁶⁾。これは、*MV*が言語・文体においてサンスクリットの影響を受けているのに関係していると考えられる⁷⁾。また、*hypermeter*についても、*DV*や*SAG*のように多くはなく、解釈が分かれるものもほとんど見られず、*pathyā*の割合も増えている。*DV*から*MV*へのこの展開は、両者の間にブツダゴサによってパーリ語が整備されたことにも関係していると考えられる⁸⁾。以上から、*SAG*は、*MV*よりもむしろ*DV*の時期(4世紀中頃～遅くとも5世紀初頭)のパーリ語を反映していると考えられる。

4. まとめ

限られた文献調査の結果ではあるが、以上の結果から次の仮説が導き出されよう。4世紀中頃から後半にかけて、中・南インドあるいはスリランカで⁹⁾、それ以前から伝えられていた初期瑜伽行派思想を反映した偈頌群(*SAG*に相当)が、大乘を志向する上座部教団(無畏山寺かそれに類する教団)の僧侶によって作られた。偈頌作者と同一人物かその周辺で、偈頌を註釈ないし発展させる形で、同経の原型部分(四巻本相当)も程なくして(5世紀初頭までに)出来上がったものと考えられる。5世紀中頃以降、すでに成立していた原型部分に、その作者とは別人物の手によって第一章が作られ、挿入されたと考えられる。第二章「百八句問答」は四巻本に含まれているが、経典作者とは別人物によって作られたものが、どのような理由でかは不明であるが、編入されたと考えざるを得ない。

1) 石橋 [2014].

2) *vip.* パターンについては Warder [1967] p. 178 を参照のこと。

3) Smith によれば、*Bhagavad Gītā*, *Nalopakhyaṃ*をはじめ、*Raghuvamśa* 等でもこの傾向を確認できるという。仏教梵語の場合、パーリ語の影響から *vip.* 3 が最多となるが、*vip.* 1 がそれに次ぐ傾向にある。

4) Smith によれば、この傾向は、*Mundaka Upaniṣad*, *Śaunaka Works*をはじめ、パーリ語の *Thera/Therīgāthā*, *Jataka*, *Udāna Varga* (Skt.) に確認されるが、サンスクリット古典では確認できないという。

5) 例として、次の偈を挙げる。anupubbena caramānā Vedissagiriyaṃ gatā | (12-13) ここで、第一音節を長母音と考えれば、*vip.* 5 になるが (|UU—U|UU—|), 第六音節を長母音と考えれば、*pathyā* となる ((|UU—|UU—|)。こうした判断が分かれる偈の数は、今回カウントしなかった。

6) 『俱舍論』の *vip.* パターンは *vip.* 1: 65, *vip.* 2: 44, *vip.* 3: 77, *vip.* 4: 38, *vip.* 5: 10, T: 1, B: 4 である。Smith [1961] が挙げているデータをそのまま用いるならば、『中論』、『大乘莊嚴經論』もこの傾向に近い。

(152) 韻律から見た『楞伽經』の成立史問題について (石橋)

7) Norman [1991].

8) Norman [1991] によれば、彼の著作はそれ以前の原初的なパーリ語とそれ以後の完成されたものとの転換点にあるとされる。

9) 常盤 [1992] は、LAS 作者をスリランカ無畏山寺の僧侶としている。無畏山寺はスリランカにおける大乘仏教の拠点といえる場所であり、LAS 作者が上座部僧侶だとすれば、有力な候補者となろう。ただ、「ランカー」の場所をめぐっては諸説あり、セイロン島ではなく中～南インド各地と見る研究者も少なくない。詳細は Shukla [2003] を参照。

〈テキスト略号表〉

LAS 南条文雄校訂『梵文入楞伽經』大谷大学, 1923.

DV Oldenberg, Hermann, ed. *Dīpavaṃsa: An Ancient Buddhist Historical Record*. London: PTS, 1879.

MV Geiger, Wilhelm, ed. *The Mahāvamsa*. London: PTS, 1958.

〈参考文献〉

Norman, K. R. 1991. "The Role of Pāli in Early Sinhalese Buddhism." In *Collected Papers*. Vol. 2, 30–51. London: PTS.

Shukla, R. K. 2003. *The Geography of the Rāmāyaṇa*. Delhi: Koshal Book.

Smith, R. Morton. 1961. "Śloka and Vipulas." *Indo-Iranian Journal* 5: 19–35.

Takasaki, Jikido. 1980. "Analysis of the *Laṅkāvatārasūtra*: In Search of Its Original Form." In *Indianisme et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte*, 339–352. Louvain: Institut Orientaliste Louvain-la-Neuve.

Warder, A. K. 1967. *Pali Metre: A Contribution to the History of Indian Literature*. London: PTS.

石橋丈史 2014 「『楞伽經』の成立時期について——三性説という視点から——」『印仏研』62 (2): 950–947.

高崎直道 2010 「『楞伽經』の祖型」『高崎直道著作集』第6巻, 春秋社, 445–459.

常盤義伸 1992 「『入楞伽經』序章の歴史的意義」『花園大学研究紀要』24: 23–47.

〈キーワード〉 『楞伽經』, 韻律, śloka, vipulā

(佛教大学大学院)